

二〇二一年度

早稲田大学大学院文学研究科
【修士課程】 専門科目 東洋史学 コース入学試験問題
※解答は別紙(縦・横書)

「一」 次の六問（イ・ロ・ハ・ニ・ホ・ヘ）から二問を選択し、また設問に答えなさい。解答は解答用紙に選択した問題番号を明記しなさい。漢字は常用漢字で表記してもよい。

イ 次の史料の全文を現代日本語に訳し、設問に答えなさい。

天下已平，高祖乃令賈人不得衣絲乘車，重租稅以困辱之。孝惠、高后時，爲天下初定，復弛商賈之律，然市井之子孫亦不得仕宦爲吏。量吏祿，度官用，以賦於民。而山川園池市井，租稅之人，自天子以至于封君湯沐邑，皆各爲私奉養焉，不領於天下之經費。漕轉山東粟，以給中都官，歲不過數十萬石。

〔中略〕

天子爲伐胡，盛養馬，馬之來食長安者數萬匹，卒牽掌者關中不足，乃調旁近郡。而胡降者皆衣食縣官，縣官不給，天子乃損膳，解乘輿駟，出御府禁藏以贍之。

設問 本史料の内容をふまえ、さらに以下のキーワードをすべて用い、前漢時代の財政の特徴について論述しなさい。

「キーワード」

帝室財政・国家財政・武帝・匈奴

□ 次の史料の全文を現代日本語に訳しなさい。また、後の問いに答えなさい。

武徳二年二月十四日制：「每丁租二石，絹二丈，綿三兩。自茲以外，不得横有調斂。」

七年三月二十九日，始定均田賦税。凡天下丁男給田一頃，篤疾、廢疾給四十畝，寡妻妾三十畝，若爲戶者，加二十畝。所授之田，十分之二分爲世業，餘以爲口分。世業之田，身死則承戶者授之，口分則收入官，更以給人。每丁歲入粟二石，調則隨鄉土所產，綾、絹、絕各二丈，布加五分之一。輸綾、絹、絕者，兼調綿三兩，輸布者，麻三觔。凡丁歲役二旬，若不役，則收其傭，每日三尺。有事而加役者，旬有五，日免其調，三旬則租調俱免，通正役不過五十日。若夷獠之戶，皆從半稅。凡水旱蟲傷爲災，十分損四已上免租，損六已上免調，損七已上課役俱免。

〔問〕唐には、租税のほかに「貢賦」という制度があった。貢賦制について、簡潔に説明しなさい。

ハ 次の史料の全文を現代日本語に訳し、設問に答えよ。

甲午、詔括戸口、以大臣忽覲虎領之。國初、ハハ方事進取、所降下者、因以與之、自一社一民、各有所主、不相統屬、至是始隸州縣。朝臣共欲以丁爲戸、公獨以爲不可。皆曰：「我朝及西域諸國、莫不以丁爲戸、豈可捨大朝之法、而從亡國政耶！」公曰：「自古有中原者、未嘗以丁爲戸。若果行之、可輸一年之賦、隨即逃散矣。」卒從公議。時諸王大臣及諸將校所得驅口、往往寄留諸郡、幾居天下之半、公因奏括戸口、皆籍爲編民。神道碑。

……中略……

丙申秋七月、忽覲虎以戸口來上、議割裂諸州郡分賜諸王貴族、以爲湯沐邑。公曰：「尾大不掉、易以生隙。不如多與金帛、足以爲恩。」上曰：「業已許之。」公曰：「若樹置官吏、必自朝命、除恒賦外、不令擅自徵斂、差可久也。」從之。是歲、始定天下賦稅、每二戸出絲一斤、以供官用、五戸出絲一斤、以與所賜之家。上田每畝稅三升半、中田三升、下田二升

半、水田畝五升。商稅三十分之一。鹽每銀一兩四十斤。已上以爲永額、朝臣皆謂太輕、公曰：「將來必有以利進者、則已爲重矣。」神道碑。

※Web公開にあたり、著作権者からの要請により出典追記しております。
元朝名臣事略 卷五 Beijing: Zhonghua Book Company. 1996

【設問】 文中でも述べられるモンゴル帝国の征服地域における戸口分配について、知るところを述べよ。

- 二 (1) 次の史料の傍線部 a を現代日本語に訳しなさい。また、この習俗に関連して、朝鮮半島における後世の習俗や言語について知るところを述べなさい。

(2) 傍線部 b について、漢字の伝播と受容について知るところを述べなさい。

其民喜歌舞，國中邑落，暮夜男女羣聚，相就歌戲。無大倉庫，家家自有小倉，名之爲桴京。其人絮清自喜，善藏釀。跪拜申一腳，與夫餘異，行步皆走。以十月祭天，國中大會，名曰東盟。其公會，衣服皆錦繡金銀以自飾。大加主簿頭著幘，如幘而無餘，其小加著折風，形如弁。其國東有大穴，名隧穴，十月國中大會，迎隧神還于國東上祭之，置木隧于神坐。無牢獄，有罪諸加評議，便殺之，沒入妻子爲奴婢。其俗作婚姻，言語已定，女家作小屋於大屋後，名婿屋，婿暮至女家戶外，自名跪拜，乞得就女宿，如是者再三，女父母乃聽使就小屋中宿，傍頓錢帛，至生子已長大，乃將婦歸家。其俗淫。男女已嫁娶，便稍作送終之衣。厚葬，金銀財幣，盡於送死，積石爲封，列種松柏。

※Web公開に際し、著作権者からの要請により出典追記しております。
三国志 魏書烏丸鮮卑東夷伝 Beijing: Zhonghua Book Company, 2020.

ホ 次の文章の全文を現代日本語に訳しなさい。また、この文章で言及されている著作や著者について知るところを述べなさい。

※この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

へ つぎの問題A、または問題Bのいずれかに答えなさい。

設問A

- (1) つぎの史料の全文を現代日本語訳しなさい。
(2) 傍線部の「征調頻仍」はどのような歴史的状況によってもたらされたものか、説明しなさい。

銘安奏言吉林爲我 朝根本重地協佐以下各官皆係滿蒙世僕或爲勦勞 後裔襲職當差或曾效力軍營同旗揀補溯自咸豐 二年征調頻仍官弁兵丁效命疆場者十居七八生 還故里者十僅二三其戸口之彫零室家之窮苦有 不忍形諸暴露者撫以斷傷奔馳苦復有衣食內 顧之憂不惟政體有虧抑且廉隅難飭卽如協領應 領俸銀一百三十兩扣成折放每年僅得實銀六十 五兩佐防以次遞減一切公私費用均在其中實係 入不敷出難免賠累	吉林通志卷三十 八
--	--------------

設問B

(1) つぎの文章の全文を日本語訳しなさい。

(2) 下線部の The Qing ancestral tomb complexes とはどのようなものか、説明しなさい。

When the Qianlong emperor fully articulated the new imperial vision, East Turkestani joined Han, Manchu, Mongol, and Tibetan as one of the five culture blocs that comprised the principal domains of the Qing realm, a status from which such other peoples as the Miao or indigenous Taiwanese, who lacked writing systems, were excluded.⁹ This position in the empire is symbolized, for example, by the inclusion of Turki (in Arabic script) among the languages used on gates and on polyglot steles. Following the Xinjiang conquest, for example, the Qianlong emperor ordered that the main gates at the Chengde summer palace and the Shenyang palace, as well as "dismount here" steles at the Qing ancestral tomb complexes, be recarved in Manchu (*Qing*), Chinese (*Han*), Mongol (*Menggu*), Tibetan (*Xifan*), and Arabic/Turki (*Huizi*). Thus he intended to "proclaim the supremacy of the unified linguistic universality of our dynastic house."¹⁰

※Web公開にあたり、著作権者の要請により出典追記しております。

Used with permission of Stanford University Press from Beyond the Pass, James A. Millward, 1998; permission conveyed through Copyright Clearance Center, Inc.

二〇二二年度

早稲田大学大学院文学研究科

入学試験問題

【修士課程】

専門科目

東洋史学

コース

※解答は別紙（縦・横書）

【二】 次の語句の中から三つを選び、それぞれについて説明しなさい。

海西女真

タイジ（台吉）

総税務司

リヴァディア条約

投下

五戸絲

諸色戸計

千戸制（モンゴル時代）

新羅村落文書

七支刀

新羅下代

聖王

石勒

アスターナ古墳群

沙陀

『貞観政要』

呉楚七国の乱

胡服騎射

『塩鉄論』

半両錢

受験番号	
氏名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

【一】

——「」から記入する——

東 洋 史 学

答 案

--

(へ 罫 へ)

「それより先の余白には線を記入しないで」

受験番号	
氏名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

東洋史学

——ここから記入すること——

「ただ、先の余計な数値に陥るな」

(へ記入)

[二]

——ここから記入すること——

東 洋 史 学

受験番号	
氏名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

「おかげさまで」の言葉が、心に残る。